

# 世界で一番面白い街を作ろう



一般社団法人 ISHINOMAKI 2.0

代表理事 松村 豪太

丁度本稿に取り掛かろうかとしていた二〇二二年二月十三日、福島県沖を震源地とする非常に強い揺れが発生、私のある宮城県石巻市も震度六弱とのことであった。この夏三度目の本祭を予定している芸術祭Reborn-Art Festivalに関するオンラインイベントをその夜に終えて帰宅し早めに休もうかと思っていた矢先のこと。ズンと縦に震わす初期微動の後の揺れは長く大きく、東日本大震災のそれを想起させた。SNSのグループメッセージでスタッフなどの無事は確認でき、施設などの被害も大きなものは無かったが、復興期間が終わろうとするこのタイミングでの余震に、マグニチュード九・〇という規模においては一〇年などまだまだ過去にはできないこと、災害の驚異は常に身近にあることを考えさせられた。

ISHINOMAKI 2・0（以下2・0）は東日本大震災をきっかけに誕生したまちづくりの組織である。震災前の状態に戻すことを復興というのであれば復興団体ではなく、困っている人のための無償の活動のことをボランティアというのであればボランティア団体でもない。震災前の石巻は典型

的な元気がない地方都市で、商店街はシャッター通り化、経済的にも文化的にも疲弊し、「黄昏ゆく街」という表現がしっくりくるような状態であった。さらにいえば、二〇一一年のこの国自体、バブル経済崩壊からのゆるやかな衰退、リーマンショックなどを経て、若者が夢を描きずらい「失われた二〇年」という表現がなされるような状況で、それは特に地方に顕著だったのである。2・0はそういう「良くなかった」「つまらなかつた」状態に戻すのではなく、大震災というリセットボタンを契機に、しがらみや、利潤追求の経済合理性から離れ、ワクワクするような地方の形を探り、震源地に最も近い街からそのプロトタイプを作っていこうという試みである。

我々は「世界で一番面白い街を作ろう」というキャッチコピーを掲げている。「面白い」とは、誰でも知っている形容詞だが、定量的に計測すること



コワーキング・イベントホール・カフェの複合施設「IRORI」

が難しいという意味では分かりにくい指標かもしれない。その捉え方は人によって異なりうるし、それでいいと思うのだが、あえて私にとって「面白い」ために必要と考える価値的な言葉をいくつか挙げるとすれば、「クリエイティビティ」「ダイバーシティ」「オープンマインド」などがある。また、手法として「とりあえずやってみる」

こと、「斜め上」なアプローチなどを好む傾向も顕著である。

二〇一一年五月頃、船が突っ込み文字通り全壊した建物の二階に、首都圏の建築家や研究者、広告プロデューサーと、震災前の状態に問題意識をもっていた地元の間が夜な夜な集まってこの「企み」は始まった。いわゆる「まちづくり団体」的な中間支援組織の多くは、民間の力を活かした協働のまちづくりを実施しようとする役所や地域コミュニティの事情を背景に設立さ



空き物件をDIYで改修した「復興バー」

れることが一般的かと思うが、2・0は全くそうではなく、インディペンデントな成り立ちをもつ。行政や地域の多数派の意図を汲むのではなく、そうしたもののへのアンチテーゼ的な企画を考えた上で、彼らに提案したり、勝手に実施したりしてきた。



二〇一四年に第二次安倍内閣において掲げられた地方創生という政策は地方に人を呼び込もうというものだが、我々は二〇一一年の設立初期から「人の誘致」というアイデアを掲げていた。それは大企業の支社を地方に誘致したり、首都圏の定年間際世代に地方に目を向けさせるということではない。我々の誘致したい「人」には「面白い」という形容詞がつくべきだと考えていた。芸術・デザイン・ITといったいわゆるクリエイティブクラスや、ヒッピー・バックパッカー的な嗜好やライフスタイルを持つ人たちが石巻に来たがる、住みたがる状況を目指したのだ。「面白い」人たちにこの街が選ばれるためには、通りにお洒落なカフェが必要だし、イケてるバーが欲しい。便利なビジネスホテルだけでなくゲストハウスのような宿泊施設があったほ

うがいい。そういった視点から「場」を設け、イベントなどを企画してきた。

例えば二〇一一年秋には、復興ポランティアの宿泊ニーズに応えるべく商店街の空きスペースをゲストハウスの運用する「復興民泊」を試みた。あるいは空き物件をそれぞれDIYで改修した「復興バー」や、コワーキング・イベントホール・カフェの複合施設「IRORI」を設け、現在でも運営している。本のコミュニティスペース「ま

ちの本棚」についてもこうした視点が背景にある。このような、遊休不動産の既存目的に囚われない活用アプローチは「2・0不動産」というプロジェクトを生み出し、その思想や手法は、当時学生だったメンバーたちが起業した合同会社巻組というビジネスとしてさらに花開いている。



我が国の人口は二〇〇八年をピークに減少に転じ、その急な下り坂はしばらく増加に転じえない。人口減少社会においては効率だけを追求しても限ら



本のコミュニティスペース「まちの本棚」

れたパイを奪い合うばかりになり、リソースが集中する東京には敵わない。こうした状況下では、一見無駄なようなことに力を注ぎ、心の赴くまま表現や創造を行う「アート」という経済合理性から離れた行為に可能性があるように思う。また、アートにはものの方に変化をもたらし得る力もある。石巻では「Reborn-Art Festival (RAF)」という総合芸術祭が二〇一六年のプレ

イベントから始まり、これまで二度の本祭が行われた。

私は二〇一一年の「TedxTohoku」というイベントでAPバンクのコアスタッフと出会い、その後二〇一三年に2・0とAPバンクの共同主催で「世界で一番面白い街を作ろう実行委員会」というものを行った。街の若手経営者など、地域の未来に本気で関心を



RAF2019のインフォメーション

持つ方たちに参加していただく連続ワークショップのような試みだ。のちに

RAFの制作委員となる宗教史学者の中沢新一氏やワタリウム美術館の和多利恵津子・浩一氏も参加したその試みのまよめの提言が「APR (Artist Power Resonance) 芸術祭を石巻で開こう」というものであり、二年後に石巻市長とAPバンク代表の小林武史



RAFの常設作品「White Deer(Oshika)」

氏を共同実行委員長としたRAF実行委員会設立へとつながるのである。

RAFにおいては、2・0が二〇一五年に廃屋のような空き家を改修した商店街のギャラリーが展示会場に使われたが、そのギャラリーはRAF二〇一七参加アーティストである有馬かおる氏によって「石巻のキワマリ荘」という「中身」が込められ、石巻に移住あるいはUターンした若手アーティストたちによって共同運営されている。キワマリ荘だけでなく二度目の本祭の際には石巻で作家活動をしていた方が実家の二階を改修してART DRUG CENTERというギャラリーを設け、やはり有馬氏と協働して運営している。さらにそこからは二〇歳そこで石巻に飛び込んできたアーティストが独立して、この春新たなアート拠点を設けるべく頑張っていると聞く。美術家以外にも、RAFは演劇人やカメラマンなどが石巻に移住するきっかけとなっている。

■ ■ ■  
間もなく一〇年。いわゆる復興期間

が終わろうとしている。架橋や防潮堤、大規模公共施設建設といった公共ハ

ード事業は一通り終了したが、そこを歩く人、利用する人の数は少ない。商店街も人通りが大都市のように多いということは無く、そういう意味では2・0がやってきたことは成果が分かりやすく目に見えるという形にはなっていない。しかし、私は確かな手ごたえを感じている。それは街にクリエイティブで「イケてる」場所が徐々にオープンし、震災直後にボランティアに関わっていたわけでは無い「次の世代」の面白い方たちが石巻を選び始めているからだ。IRORIの隣には写真スタジオが入居し、その二階には仲間とチームを組んでオーダーメイドのウェディングを実施する会社がスタジオを開いた。通りには一見そうとは見えないお洒落な福祉施設が開業し、手づくりで施工しミシユランガイドに掲載された料理店も繁盛している。こうした手ごたえを種とするならば、次の一〇年、本当に世界で一番面白い街へと芽吹くのか試されていると思う。